

タイミング

2024.11.11

職場で、饒舌になることなど滅多にない。この前、珍しくよくしゃべった。なぜ、そうになったのか。複数のやるべきことが、すべて終了したタイミングだった。気分がよかつたのである。心が軽くなったのだろう。

気の毒なのは、話を聞かされる方である。こちらは話したくても、聞く方が聞きたいかはわからない。そもそも、話したいタイミングと聞きたいタイミングとが合うことなどあるのだろうか。たいていは、話したい方が優先されて、聞く方がそれに合わせているだけだろう。

「今、話してもいいですか」と断る人がいる。こう言われると、ほとんどの人は「大丈夫ですよ」と答えるだろう。「今、ちょっと待って」とは、なかなか言いにくい。これを言ってしまうと、感じがわるい。話しかけた人は、ますます話しかけるタイミングに苦慮することになるだろう。

今もそうなのだが、家に帰ったら、あれも話したい、これも話したいと、家人に話したいことがいっぱい出てくることがある。忘れないようにと、スマホにメモをすることもある。家人が帰宅する。予定していたことを話す。意外とあっけなく話が終わってしまう。こちらは話したいのだが、相手が聞きたいかは別の話である。逆のパターンもある。家人は話したい。私が、話を聞く。きっと、家人は話すことに満足することは少ないだろう。何せ、聞く相手が私である。うんうんと頷きながら聞くことなどない。誤解のないように断っておくが、状況によっては、頷きながら話を聞いていることもある。

珍しく饒舌になってしまったときは、これも珍しく、自分の子どもの話をした。特に、大学受験におけるエピソードである。今まで人に話したことはなかった。これから、お子さんが中学生になり、やがて高校生になり、大学受験を迎えるであろう親御さんへのアドバイスのつもりだったのだろう。余計なお世話と言えば、その通りである。聞かされる方は、大変である。こちらは、しゃべったがいいが、しゃべりすぎたと反省している。

数えてみた。職員室で過ごすというのが15年ぶりだった。なるほど、ペースがつかめないわけである。職場では、話しかけることにおいて、先生方に迷惑をかけないよう努めている。かえって、それがよくないということもありえるが。

自分の中に、今までの経験に基づいた“ものさし”的なものがある。ただし、このものさしは、決して強固なものではない。小学校にいったり、中学校にいったり、高校にいったりしているため、かなり柔軟性に富んだものさしである。だが、これが幼稚園に当てはまるかというと、当てはまらないだろう。そこで、新たなものさしをつくる必要が出てくる。そのためには、話しかけて話を聞かなければならない。そのタイミングが重要である。